トップの視点

九州キリスト教社会福祉事業団常務理事 介護保険総合ケアセンターいずみの園 施設長 冨永 健司氏

『介護保険総合ケアセンターいずみの園』は、中津市永添と蛎瀬に高齢者介護や障がい児・者デイ、児童クラブの施設や事業所があり、職員324名、予算規模14億5千万円で介護保険の分野で常に先進的な事業に取り組んでおり、行政からの信頼も厚い。

また、法人内にはグレース保育園ほか市外とあわせ3つの保育園がある。

今回は法人の常務理事で、施設長でもある冨永健司氏にお話を伺った。

愛と奉仕につつまれた生涯安心の生活を

特別養護老人ホームは1978年に設立され（当初定員50名）、今年で33年を迎えますが、キリストの愛と奉仕の精神のもと、高齢者ケアに邁進してきました。

この間、「生活の場」とはいいがたい時代もありましたが、介護保険になり集団ケアから個別のケアを目指す「ユニットケア」が打ち出され、当園も2007年に新型特養といわれる（写真）ヨハネ館（40名・特養全体の定員100名）を増設し、今ではNPO法人全国高齢者ケア研究会から2010年ケア大賞（日本一のケア）をいただくまでになりました。

また、ご利用者が希望を持って生活して頂けるように、身体的なケアの充実にむけてリハビリ課を設け、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士を配置し、専門的なリハビリ、フットケア、嚥下、口腔ケアなど行っています。

さらに、医療の不安をなくすため「クリニックいずみ」を置き、常勤医師に外来者も含め診療をしています。その隣にはリハビリセンターがあり、通所リハ（定員20名）で機能低下による生活上の不安のご利用者に対し、作業療法士や看護師、介護福祉士などがより専門的で質の高いサービスを提供しています。

特別養護老人ホームヨハネ館

24時間365日家庭での自立を支援

厚労省は単身・重度の高齢者であっても、可能な限り住み慣れた地域の在宅での生活継続を支援する仕組みを大きな課題として、24時間対応の定期巡回・随時対応型サービスのニーズにこたえるべく、「地域巡回型訪問サービス」の平成24年度実施を目標とするモデル事業を予算化しました。

このため、平成23年2月から、全国8市区町の事業所指定がなされましたが、いずみの園はそれまで実施していた「夜間対応型訪問介護」の先駆的な実績を評価され、中津市を実施主体としてその事業所に指定されました。

この事業は、市内のあらかじめ登録されたご利用者のご自宅を20分程度の訪問、巡回し、食事や排泄、更衣、安否確認の支援を行い、「我が家で暮らしたい」という想いを可能にするケアです。23年度もモデル事業が継続指定されましたので、高齢者や障がいのある人の尊厳と生命・日常生活を24時間365日見守りながら、安心と安全を支援するため、総勢84名の訪問介護員で頑張っています。

高齢者、障がい児・者、子どもとの共生

平成15年、市内蛎瀬の旧グレース保育園跡地にかきぜサポートセンターを開設して8年になりますが、その間、放課後児童クラブ『ピーター1』（現在40名のこどもが利用）、高齢者や障がい者の「デーサービスセンターかきぜ」（利用定員25名）、昨年7月から小規模多機能居宅介護（「通い」を中心に「訪問」、「泊まり」の3つのサービスを24時間切れ間なく提供）「寄り合いセンターいずみ」（登録定員25名）と認知対応型共同生活介護『グループホーム・けやき・いちょう』（定員9名×2ユニット）を開所しました。

また、本年4月から宇佐支援学校中津校の児童・生徒さんの放課後の活動の場の提供を中津市から委託されました。日中一時支援事業「マルコ」（定員5名）といいますが、始まったばかりの事業なので、ご家族の信頼を得、安心してご利用いただけるよう取り組んでいきます。

かきぜサポートセンターは、多世代、障がいの有無によらず利用者の方が共生し、かつ地域に密着したサービス提供を目標としています。一度お気楽にお立ち寄りください。

ISO9001（品質管理）認証事業所

現在、福祉施設を施設以外の人が評価する仕組みは、サービス情報公表制度、行政による指導監査と第三者評価等の3つの制度がありますが、いずみの園ではこれらを適切に組み合わせて、より質の高いサービスが提供できるよう体制を整えています。

当園ではこれらに加え、2002年3月にISO9001（品質管理）の認証を取得し①目標設定②手順書の作成③法令順守④リスク管理⑤顧客満足を日々点検しています。本年4月に3回目の更新審査を受けています。

福祉施設は「誰のものか」ではなく、「誰のために」というテーマで実践しています。

社会的責任（CSR）

いずみの園では、東日本大震災から4日後、被災した仙台市内の施設と連絡が取れ、西畑修司氏の協力のもと、3月19日、同じ日本人としてできる限りのことをすべきとの想いで、当園内に備蓄していた食糧や水、紙おむつに加え、お米や生活用品など総額250万円相当を西畑氏の用意したトラックでノンストップの翌朝、現地の施設や宮城県内の避難所にお届けしました。こうした社会への貢献は、社会福祉法人が公共の福祉を増進する という趣旨のもとに経営される法人であることから、今後とも取り組んでいきたいと考えています。

これからの10年「地域包括ケア」の推進

介護保険制度が始まって10年がたち、これまでは介護ビジネスの側面もあって競争の時代となり、当法人も多機能化・総合化を図ってきました。

しかし、これからの10年は日本がかつて経験したことのない、団塊の世代が高齢期に入る本格的な「高齢社会」を迎えます。より小さな生活圏域（中学校区）で、「医療・介護・予防・住まい・生活支援サービス」の支援を必要とする人（高齢者、障がい者、児童など）に利用者本位で継続的・包括的に提供するシステムの構築が求められています。

このため、アメニティ（快適主義）、ヒューマニティ（人間主義）、ローカリティ（地域主義）の法人コンセプトのもと、中津市における地域のネットワークづくりに取り組み、さらに強化していきたいと考えております。

中津 蘭学とパイオニア精神

2 リーフデ号苦難の航海

医療法人玄真堂
川嶌整形外科病院
理事長
川嶌　眞人氏

1598年の初夏、の当時の航海は東洋に向かうためにはアフリカの最南端のマジェラン海峡を経て太平洋に出なければならなかった。

リーフデ号は五艘からなるオランダの東洋遠征隊に加わって、ロッテルダムの港を出帆した。

（図1）船隊の司令官はヤコブ・マフというオランダ人であったが、その指揮の下になる旗艦ホープ号に有能な航海長として乗船していたのはウィリアム・アダムスというイギリス人であった。五艘の中で一番大型の船はホープ号であった。

130人の乗組員が乗船していた。リーフデ号はこれに次ぐ大きさの船で、110人の乗組員が乗船していた。この乗組員たちには宿が与えられ、食事も与えられたが耶蘇会の宣教師たちは敵国のオランダ船であることがわかると海賊だと称して誹謗と中傷を雨のように降り注いだ。

5月12日、ウィリアム・アダムスは病床にある船長クワケルナックの代理として大阪に送られた。家康はこの聡明さに感嘆し、地元民による略奪の補償として多額の金品を与えて保護した。リーフデ号の船尾に飾ってあったエラスムスの木像は栃木県足利郡の龍江院で保存されていたが、現在は東京の国立博物館の収蔵品となっている。（図2）時々九州国立博物館にも展示される。

【図1】洋船図（今宮神社）

【図2】エラスムス像（国立博物館蔵）

家康は関が原の合戦で勝利を得て、天下を統一するとアダムスを側近として召し抱えた。アダムスは新しいヨーロッパの科学知識や数学、幾何学を家康に教えた。

アダムスは天文学、砲術、造船技術と科学の結晶ともいうべき技術者であり、家康にとっては格好の外交・技術顧問であった。アダムスは宗教的な色彩が全然ないところに家康は大いに心を惹かれた。

アダムスは家康から相州三浦郡逸見村に領地が与えられ、三浦按針と名乗るようになった。按針とは水先案内人のことで、家康にとってはまさにそのとおりの役割を果たしていた。現在の横須賀市逸見町の領地は当時250石と伝えられており、旗本並みであった。江戸にも日本橋に近い小田原町の一角に屋敷が与えられ、寛永の頃から按針町と呼ばれるようになった。

リーフデ号の船長クワケルナックは家康から貿易許可の朱印状をオランダの東インド会社に届けるために、慶長10年（1605）、平戸から藩主松浦鎮信の船に乗りマレー半島パタニに向かった。慶長14年（1609）オランダから二艘の船が平戸に入港し、オランダ国王オレンジ侯の書状が家康のもとに届き、正式に日蘭の国交が始まった。平戸にはオランダ商館が設立され、商館長にヤコブ・スペックが就任、リーフデ号の船員ヤン・コセインスが就任した。

参考文献

一、岡田章雄：三浦按針、思文閣出版、京都、1984年
二、惣郷正明：洋学の系譜、研究者出版、東京、1984年
三、大分歴史博物館：おおいた蘭学事始、宇佐市、2005年
四、平戸市日蘭交流400周年記念事業実行委員会、平戸オランダ商館展、2000年
五、神戸市立博物館、日蘭交流のかけ橋、1998年

信望愛　愛と奉仕のいずみの園
介護保険総合ケアセンター　生涯安心
ホームページ　http://www.izuminosono.jp
Since1978
いずみの園
中津市永添2744
0979-23-1616

いずみの園の全景

かきぜサポートセンター

寄り合いセンターいずみ全景

かきぜグループホーム中庭

児童クラブピーター

中津発　第7回地域密着型福祉全国セミナー

～よろうち生きる　福祉の里づくりのススメ～

開催日　2011（平成23）年7月30日(土)～31日(日)
場所　中津文化会館大ホール（メイン会場）ほか
主催　中津発　地域福祉セミナー実行委員会
募集人員　800名

30日(土)

●セミナープレイベント「災害時における包括的ケア」
全国コミュニティライフサポートセンター　理事長　池田 昌弘
●オープニング（13：00）　挨拶　実行委員長　大霜 正光
中津市長　新貝 正勝
●基調講演「地域でケアをするということ」　東京大学　名誉教授　大森　彌
（厚生労働省社会保障審議会会長）
●DVD上映「地域共同ケアのすすめ」
●パネルディスカッション「誰もが24時間365日安心して暮らせるための地域包括的ケアとは？」
厚生労働省老健局介護保険指導室　室長　千田　透　他

31日(日)

第1分科会「認知症とともに暮らす～その人自身の可能性～」
第2分科会「地域包括システムの取り組み」
第3分科会「一人ひとりを見逃さない地域づくり」
第4分科会「子育て地域は“大きな家族”」
第5分科会「障がいとともに働ける場所づくり」
第6分科会「中津発 たのしい輪！」
●パネルディスカッション「タテからヨコへ　つながる福祉のススメ～よろうちいこうや～」
介護保険総合ケアセンターいずみの園　施設長　冨永 健司
中津市　副市長　鯨井 佳則
大分県福祉保健部　部長　永松　悟

一般市民の方も歓迎です。お問い合わせ：中津市社会福祉協議会・いずみの園